



2018 Report from ^{Faculty Development} **FD Salon** of RULEC

18-1

龍谷大学 FDサロンレポート

「高校現場ではどのような授業が行われているのか」
～京都府立西城陽高校のアクティブラーニング型授業の事例から～

講 師：大川 沙織 氏(京都府立西城陽高等学校 地歴公民科)

日 時：2018年 10月 16日(火) 16:15～17:15

場 所：深草学舎和顔館4階 第2会議室

1. アクティブラーニング導入の経過

アクティブラーニングはアメリカで生まれた学習スタイルで、1969年にチッカリングという学者がアクティブラーニングを導入するための前提となる考え方を提唱しました。日本では、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会から2008年に出された「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」で、アクティブラーニングという言葉が初めて登場しましたが、すぐに消されてしまい、その後、数年間は議論されることがありませんでした。2012年、中央教育審議会の答申で再びアクティブラーニングについて語られ、受動的な授業ではなくディスカッションやディベートといった、双方向の講義が必要であるということが提言されました。

このころから、京都大学高等教育研究開発推進センター教授の溝上慎一先生らもアクティブラーニングを評価し始め、世の中でアクティブラーニングが盛り上がりを見せていきました。当時の社会背景として、国際化やICT化、経済界から即戦力となる人材が求められたことも、この盛り上がりのきっかけとなりました。溝上先生は、アクティブラーニングについて、「アクティブラーニングとは、一方的な知識伝達型講義を聞くと



いう学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のことである。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化が伴う。」と定義しています。講義型の授業は否定せず、アクティブラーニング型授業の一環として位置付けています。

2014年には、大学入試について、知識だけを問うのではなく、判断力や思考力を問うものにしなければならないという改革提案がなされ、時を同じくして、小中高等学校にもアクティブラーニングが導入されま

した。資質・能力が重視されるようになったことや、PISAの順位の低下などが背景にあります。

2015年には、授業の方法よりも、教育の目標、内容、方法、評価をアクティブラーニングの視点で捉えるスタンスに変わりました。アクティブラーニングという言葉が一人歩きし、形骸化が進んでしまったことから、2016年8月の中教審教育課程部会の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、アクティブラーニングという言葉は括弧書きになり、「主体的・対話的で深い学び」という文言が登場しました。さらに2017年、小中学校の学習指導要領からアクティブラーニングの文言が消え、「主体的・対話的で深い学び」という言葉だけになりました。そして2022年度から、高校においてアクティブラーニングが本格的に実施されます。

2. 高等学校地理歴史科での実践

2-1. 授業の流れ

ここからは、私が勤める京都府立西城陽高等学校での実践についてお話しします。私が教えている世界史Aの授業を例に取りたいと思います。本校では2年生が世界史Aを履修します。単位数は2単位（週2時間）で、高校の授業は1コマ50分間なので、とても短い時間になります。年間では、2単位×35週で70単位ある計算ですが、実際はもっと少ないです。

そのような中でアクティブラーニングを実施しました。効率良く授業を進めるため、講義ではパワーポイントを使い、生徒にはプリントを配って、板書代わりにそのプリントの空欄を埋めさせました。この講義パートを1時間で行い、次の1時間で講義内容に関する問いを出しました。まず自分で5～10分ほど考えさせ、次に4～5名の班を組ませて、教科書や資料集を用いながら班で10分ほど議論して、最終的にまとめた意見を、ホワイトボードシートに書いて黒板に貼らせました。

2-2. 授業例

古代中国で中央集権体制が出来上がっていく過程を講義したときは、単元を通した大きな質問と、その大きな質問に答えるために理解が必要な小さな質問に分けて問い掛けました。小さな質問は「殷・周と秦・漢の統治方法の違いは何か」というふうに最初からハードルが高過



ぎたため、意見がまとまるまでに非常に時間がかかり、出てきた解答も的を得ないものばかりでした。

南アジアについて講義したときは、仏教の話が出てきたのですが、生徒にはイメージが湧きづらいようでした。そこで、少しでも当時の雰囲気を感じてもらえるよう、手塚治虫の漫画「ブッダ」の一部をプリントに刷り、役を生徒に割り振って読んでもらいました。そうして講義を進め、「仏教はどのような経路で外国へ広まったのだろうか」という問いを出しました。これも難しかったのか、「国から国へと伝わった」という解答もあれば、文章で書かずに「ブッダ→インド人→中国→朝鮮半島→日本」という解答もありました。

古代オリエントの講義をしたときは、「オリエントに登場した多神教・一神教の類似点は何だろうか」という問いを出しました。この問いを出したのは、一神教・多神教の違いはあるかもしれないけれど、聖典などに見られるエピソードは多神教から伝わってきたものもあり、相互関係があることに着目してもらいたいからです。教科書の内容だけでは面白くないので、資料として、ギルガメシュ叙事詩が分かりやすく絵本になったものの一部分を紹介しました。その後、生徒たちの解答の一つに、「死後の世界を信じていたり、文字が使われていたりしている」というものがありました。なぜ文字のことをいうのだらうと思い、資料を見ると、各宗教の一覧表に「この文明で起こった文字は」と書いてありました。彼らは、この宗教があったから文字が作られたのだという理解をしてしまったのです。ただ資料集を渡して使うように言っても、なかなかうまく使ってもらえないことが、やればやるほど分かってきました。

これらの解答の後、生徒の理解が進まないまま授業が終わってしまわないよう、私が添削していきました。これに10～15分ほど、あるいはそれ以上かかるときもあります。

このような授業をして、生徒がどう感じているのか、1学期の終わりに聞いたところ、出された問いについて39人中27人が「難しい」と答えため、質問を受ける段階で難があることが見えてきました。また、39人中3人が「解答を整理してほしい」と答えました。やはり、彼らが書いたものを添削し、間違いをきちんと訂正しなければ、彼らの基本的な理解を促せないということです。

3. 今後の課題

以上のことから、アクティブラーニングをするに当たっては、基礎知識の少なさや読解力の低さ、文章表現力の低さがネックになっている気がしています。また、定期試験では、基礎的な知識を問う問題と、アクティブラーニングの授業でやったことと同じような問題をもう一度文章で書かせる問題を出しましたが、点数に結び付かず、定期試験の作成方針を吟味する必要があると考えています。授業の前後に自らインターネットで調べてくるような、やる気のある生徒も複数いますが、中には積極的にやっているように見せかけている子もいて、フリーライダーを防ぐことはできません。

私もまだ慣れていないので、今後、彼らの読解力に合わせた適切な問いを与えられるようになれば、それなりにレベルも上がってくるのではないかと考えています。これまでは、こちらが質問を用意して解かせてきましたが、

それよりも生徒が自ら授業のキーワードの中から質問を作り、自ら答えていく方法に方向転換した方がいいのではないかと、最近は考えています。

質疑応答

Q1 アクティブラーニングをするときは、従来の知識を伝達するところを圧縮しない限り、グループでのディスカッションになかなか時間が取れません。しかし圧縮すると、生徒としては、知識を受けて、それを咀嚼する時間が減ることになります。そのあたりはどのようにお考えですか。

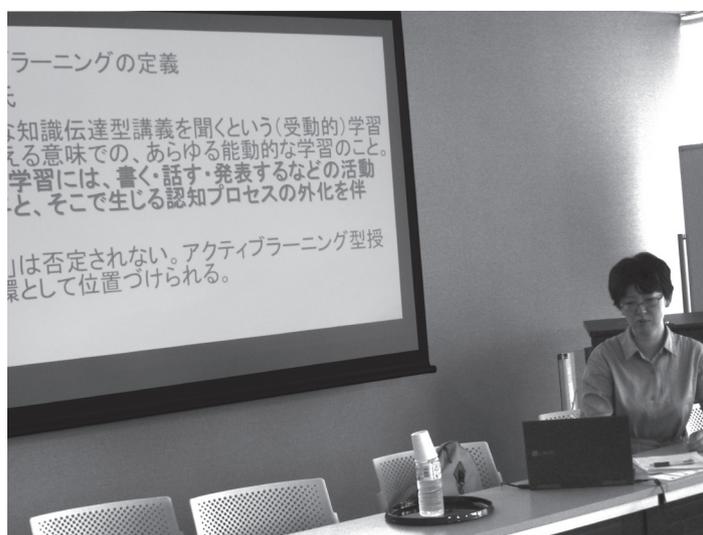
大川 そもそも知識を入れる段階のやり方を変えなければならないのではないかと考えると、反転授業で、事前に自分で教科書をまとめてくるよう宿題を出すなどして、構成をがらりと変えないと難しいのではないかと感じています。

Q2 教材研究にとっても時間がかかっているように思いますが、実際にはどれぐらいの時間をかけていますか。また、他にも社会の先生がいらっしやると思いますが、その先生方とはどのように教材を共有されていますか。

大川 教材研究は、何か新しい資料を探してきて、高校生が分かるように加工しようと思うと半日かかるので、土日を使うこともあります。ただし、全ての単元でアクティブラーニングをしているわけではなく、普通に授業をすることもあります。ここは面白いからしっかりやりたいというところは時間をかけたりして、これに関しては、私は特に苦痛を感じていません。

教材の共有に関しては、アクティブラーニングに関心のある先生には私が作ったパワーポイントを丸ごと提供して参考にしていただいたり、教材の共有フォルダがあるので、そこに入れて自由に使ってもらう形で共有しています。

Q3 今回例に出された世界史Aは既存の科目ですから、その枠の中で授業の展開を考え、生徒からすれば



学び方としてアクティブラーニングの手法を取り入れ、主体的にそのテーマについて調べ、考え、発表するということだと思います。だとすると、先生が取り組まれているような既存の科目の中でアクティブラーニングが今後どんどん展開されていく方向に高校教育が動いていくのか、あるいは、各担当の先生方の裁量でやっていく形になるのか。西城陽高校ではどのようになりそうですか。

大川 指導要領を見ると、問いを立てることが事細かに書かれています。ですから、真面目にやれば、どの教科でもこの方向になっていくことは間違いのないと思います。ただ、本音では、まだまだ裁量の部分も残るのではないかと思います。数としては増えてくるのは間違いありません。

Q4 西城陽高校では、学校全体としてどれぐらいの先生がアクティブラーニングを取り入れていますか。まだ高校生全員がアクティブラーニングをしているわけではない印象があります。

大川 理科、数学で行っているようです。また、保健体育では、保健の授業でプレゼンを以前からやっているの、これもアクティブラーニングの形になると思います。

Q5 アクティブラーニングを取り入れた授業をするときに、現場で一番問題になるのは、教科書を1年間で終われるのかということです。これまでも終われなかったのに、アクティブラーニングを取り入れると

もっと時間がかかるので、積み残しがたくさん出てくるのが懸念されます。

大川 教科書は1年ではなかなか終われません。ですから、アクティブラーニングをやる頻度が重要になってくると思います。各単元の終わりにやるのではなく、もう少し授業を進めてからまとめてやった方がいいと思っています。

Q6 一クラスの中にもいろいろな生徒がいると思いますが、この授業を楽しみにしている生徒は多いですか。それとも、普通の授業がいいという生徒もいますか。

大川 多くの生徒はこの形の方が面白いと言っています。ただ、少数派ですが、私の学年に限らず、話すことが苦手な生徒は、辛い思いをしているので、配慮が必要です。



FDサロンレポートとは

学修支援・教育開発センターでは、教職員間の交流の場として、各種の教育活動の経験や意見が話し合えるように「FDサロン」を2002年10月から開催しています。

学修支援・教育開発センターが、話題提供者をコーディネートし運営しています。当初は話題提供者のお話に耳を傾け、お茶でも飲みながら自由に意見交換等が行える機会として開催してきました。しかし、開催時間や開催場所の関係から、参加ができないとの声も聞かれました。そのようなことから、FDサロンでの話題を全学に普及させ、より一層FDの取り組みを深めていくためにFDサロンレポートを発行しています。

FD サロンレポート 18-1

発行日：2018年12月

発行：龍谷大学 学修支援・教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

TEL.075-645-2163 FAX.075-645-2190

<http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>